

愛すればこそ

新聞記者をやめた日

内藤國夫

文藝春秋

愛すればこそ
新聞記者をやめた日

内藤國夫

文藝春秋

愛すればこそ——新聞記者をやめた日

昭和五十六年十一月二十五日 第一刷

著者略歴

一九三七年芦屋生れ。一九六一年
東京大学法学部卒、同年毎日新聞
社に入社。一九八〇年同社を退社。
著書は「ドキュメント東大紛争」
文藝春秋 一九六九、「公明党の
素顔」エール出版 一九六九、「新
聞記者として」筑摩書房 一九七
四、「美濃部都政の素顔」講談社
一九七五、「ハガキ無宿」毎日新
聞社 一九七九、ほか多数

定価 一二〇〇円

著者 内藤 國夫 ないとう くにお

発行者 半藤 一利

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話(〇三)二六五一一二二一

印刷所 凸版印刷

製本所 中島製本

万一、落丁・乱丁の場合は

お取替致します

〈目次〉

- 1 発端・創価学会レポート 5
- 再録 池田大作名誉会長復権にうごめく怪情報 13
- 再録 「日本をダメにした」革新叱る——臼井吉見氏インタビュー 47
- 2 激怒・新聞記者と組織 52
- 3 二通の退社届 88
- 再録 同時進行ドキュメント「毎日新聞」 90
- 再録 同時進行ドキュメント「毎日新聞」社内版 106
- 4 「創価学会取材を認めず」 146
- 5 苦言・毎日を愛するが故に 204

装帧
坂田政则

愛すればこそ

新聞記者をやめた日

1 発端・創価学会レポート

一九八〇年六月七日、土曜日の夕刻、毎日新聞社の取締役出版局長と一緒に、那須ゴルフ倶楽部でワンラウンドを終え、中野好夫氏の待つ別荘へと引き揚げたときから、騒ぎが始まった。ハーフで一足先きに別荘に戻っていた中野氏が私に告げた。

「キミの自宅から電話があった。急用があるらしい」

一線の取材現場を退き、もはや事件などでの緊急呼び出しを受ける身ではない。なにごとだろうと自宅に電話をしたら「会社であなたを捜している。ただならない様子でした。すぐ会社に電話を」と、女房の返事。電話をかけてきたのは特別報道部長とのこと。つい一カ月ほど前の人事異動で、私は住みなれた社会部から特別報道部へと配置換えされた。「編集委員を活性化させるため」との理由で、各部付きや編集局付きの編集委員がひとまとめにされ、それまでは自主管理、つまりは「一匹狼的存在」であった編集委員に、お目付け役がつき、直属上司に管理される身となっていたのだ。

ともかく会社に電話を入れた。

「いま、どこにいるか。これからすぐ、社にあがってきてほしい。編集局長がキミに話したいことがあるんだ」と特報部長。

「そんな無茶な。こちらにも都合がある。いまから社にあがるわけにはいきません。電話で済ませてもらえませんか」と私。だが、用件は告げられず、「お願いだ。ともかく、すぐにあがってきてくれ」の一点張り。「それなら、せめて編集局長を電話口に」との要請も聞きいれられなかった。

特報部長との間で、もどかしいやりとりがむなく繰り返される。新聞記者を業としている以上、用件次第によっては、つまり必然性があるなら、どんな深夜、どれだけ遠方からでも、社にかけつける覚悟はある。しかし、用件も明らかにせず、ただひたすら社にあがってこいと「お願い」されても、応じられない場合がある。私は、そう説明して、いったん電話を切った。

事情のわからない中野氏は「会社も無茶なことを言うねえ」と怪訝な表情をしている。

「いったい、なにがあったのか。どうすればよいだろう」とかつての編集局長、現出版局長に相談をもちかけた。「キミの創価学会レポートが問題になっているのかもしれないな。編集局長が今夜中にキミから事情聴取しておく必要が生じたのだろう。社長に報告を迫られているのではないかな」と出版局長がつぶやく。

「創価学会レポート」は二日前の六月五日、『現代』誌上に発表された。五、六の両日、社ではなにも問題にされなかった。編集局長に命じられた「60年安保から20年」を回顧する署名入り原稿も前日の六日、社に出稿し、特報部長からは「七、八の両日は休みます」と了解をとりつけて

あった。

土、日曜日を利用しての那須でのゴルフ。中野好夫氏との数カ月前からの約束だった。出版局長が参加したのは理由があった。編集局長時代に私が中野氏に紹介し、それが縁で、いま毎日新聞の特徴のひとつになっている「新聞を読んで」の第一号に中野氏が執筆を依頼され、氏は「西暦主・元号従」を提唱された。編集局長はこの提唱を受けて、一九七七年一月一日から毎日新聞に印刷される日付けを従来の「元号主・西暦従」から、現在の「西暦主・元号従」に改めた。朝日新聞のように変更理由を読者に知らせず、こっそりと改めたのではなく、堂々と社告で説明した。ために一時は右翼や一部宗教団体の激しい攻撃にさらされた。

その「仕掛人」三人が、久々のゴルフ決戦を楽しもうと、私の運転する車で七日午後、那須に着き、明日の本番に備えて練習を終わったところへの出社命令。理由も明示されずに、二人を残して東京に戻るわけにはいかなかった。まさか退社騒ぎに発展するとはユメ思わず、ただ「社命に従わない、こういう頑固社員は」出世できないでしょうね」と苦笑する私に、中野氏は「宮仕えの身はつらいねえ」とからかわれた。

特報部長から再び電話が入り、やっと用件が告げられた。明言はされなかったが、やはり、『現代』七月号での創価学会レポートが社の上層部の間で問題にされているらしかった。特報部長は、さも困りぬいた口調で「九日からのキミのオーストラリア出張をとりあえず延期してほしい。それと九日夕刊組込み予定のキミの60年安保原稿も、紙面掲載を少し遅らせたい。その理由を編集局長が直接、説明するので、今夜中にどうしても出社してほしいんだ」と重ねて懇願された。「お願いだからそうしてくれないか」とまで頼みこまれた。私もまたお願いした。「その程度のこと

となら電話で話しあえるはず。編集局長はなぜ電話に出られないのですか。オーストラリア出張と60年安保記事の延期は、社がそうしたいのなら、ご自由になさってください。とにかく今夜中に出社するのは、不可能です。電話で用を済ませましょうよ」。だが私の願いは聞き入れられず、二、三時間後、あらためて連絡をとりあう約束をして、電話を切った。

その間に三人で食事に出かけた。せっかくの楽しい夕食。気が重く、明日のゴルフの話より、サラリーマンは会社の命令にどこまで拘束されるかなどの、息苦しい話になった。夕食後、中野氏の友人で、那須の山荘にとじこまること三十余年、辺地医療にたずさわるかたわら、悠々自適の華麗な生活を楽しまれている名物田舎医者・見川鯛山氏邸を訪れ、談笑した。

氏は毎日新聞の愛読者であった。部屋机にある、その日の毎日新聞の一面には、たまたま私の書いた「ひと」が掲載されてあった。フラメンコの情熱的な踊り手、長嶺ヤス子さんへのインタビュー記事である。コタツに坐った場所から、奇妙にその記事が目についた。オーストラリア出張中のヒマダネ原稿として出稿してあったのが、ストック原稿不足のせいか、七日付け朝刊に掲載された。結果としては、それがトラブルの引き金になった。社長以下、社の上層部の目にとまり、「あとで問題になりそうな社外原稿を書いた内藤を、これまでどおり紙面に登場させていいのか」と危機感をつのらせたのだった。

しかし当夜の私に、そんな上層部の思惑は知る由もない。だが、結果としては、これが毎日新聞紙上での、私にとっての最後の署名記事となった。そうとは思ってもみないままに、長嶺ヤス子インタビュー記事を見やりながら「田舎医者の生きざまを、そのうち是非、『ひと』欄で紹介させていただきます」と見川氏に予約をとりつけた。

ウイスキーや山菜料理をこちそうになりついでに、見川氏宅の電話を拝借した。同夜の当番デスクである編集局次長を相手に「すぐ帰ってこい」「いや帰らない」「組織のことを少しは考えろ」「考えはするし、延期命令には従う。しかし今夜中に決着をつける必然性がない。明日の夜ならどこにでも参上する」と不埒なやりとりを重ねる。

結局、明八日の午後三時までに、と主張する局次長と、午後九時以降なら、とねばる私との間をとって、午後六時に社の近くのバレスホテルのロビーで編集局長と会う約束をとりつけて、やっと電話交渉にケリがつけられた。

翌八日のゴルフ。散々な成績だった。口の悪い中野翁から、こっぴどくからかわれた。

「相変わらずヘタクソだなあ。腕が悪いのか、人間ができていないのか。両方だろう」

ミス・ショットの連続。精神的動揺がわれながら恥ずかしかった。ゴルフをしても、心ここにあらず。予想される編集局長とのやりとりを思うと、頭が痛かった。プレイ終了後、風呂にも入らず、東京に向かった。東北自動車道を時速百三、四十キロでとばしにとばした。警報ブザーが鳴りっぱなし。

「死地」に急ぐこともないのですが」と詫言を言う私に、中野氏は「約束の時間に遅れて、叱られる口実をふやすよりは、ましだろう。それにしても、その警報ブザーとかはうるさいねえ」と珍しくも、心やさしいなぐさめで、スピード違反を黙認してくださった。社の上層部のなかでは、私の数少ない理解者である出版局長。目をつぶったまま、なにも言わない。ずぶとく眠っているのか、これから始まる社と私とのトラブルの解決策に思いをめぐらせているのか。

予定より一時間も早く、バレスホテルに着いた。編集局長とは、ホテルのラウンジでウイスキ

ーを飲みながら話あった。こっぴどく叱られるのかと心配していたら、意外にもなごやかに、『社内事情』が説明された。

まず、こう念を押された。

「これから話すことは、キミにとって不愉快かもしれない。でも怒って、社を辞めるようなことはないだろうな。われわれもそれを一番、心配しているんだ」

なにを話されるのか、見当もつかないが、居心地のよい、わが愛する毎日新聞社を、自らいま、飛び出す気持など、さらさらなかった。私は編集局長に確約した。

「ご安心ください。ボクはそんなにバカではありません。納得のいくお叱りなら、ちゃんと受けます」

編集局長は、おだやかな口調で私を説得するように話を始めた。

「キミが『現代』七月号に書いた創価学会レポートを、五階が問題にしている。まずいものを書いたと、とくに社長が激怒されている。ぼくは、そう怪しからんとは思わないけれど、まあ、ぼくの立場も察してくれよ。それで、とりあえず明日からのオーストラリア行きはしばらく延期してくれないか。キミの創価学会レポートをめぐって、今後、不測の事態も予想される。創価学会が名誉毀損で告訴してくるかもしれない。そういうときに外国出張するのは、国外逃亡と誤解されても困るからだ。

それとキミの署名記事を紙面に載せるのは、しばらく見合わせたい。キミは創価学会レポートを毎日新聞記者として発表したのではない。だから毎日新聞とは関係ないとも言えるけど、キミの社外活動を社が容認していると思われるのも、この際、まずいというのが五階の判断だ。出稿

済みの「60年安保記事」も、九日の夕刊掲載はとりあえず、見送る。しかし、内容はよく書けているし、私が発注したものだ。6・15の六月十五日までには紙面化するよう、編集局長として最大の努力をする。そのためにもオーストラリア出張の延期に応じてほしい」

「五階」とは「役員室」を意味する社内用語だった。編集局は四階にある。そして五カ月ほど前の二月に就任したばかりの編集局長は、まだ取締役になっていなかった。四階の総責任者ではあった。五階の圧力に弱いとは、十分に理解され、同情もされた。

それで、私の方がかえってなぐさめるように、編集局長の要請を受け入れた。ただ、反論すべきは反論した。

「私にベナルティを課したい、とでも五階は考えているのでしょうか。それならどうか正規の懲戒委員会にかけて、私の弁明や事情聴取をしたあとで、処罰してください。私自身はこれまでどおり、結果的には良かれと思って創価学会レポートを書いていきます。これから創価学会を襲うであろう深刻な内部対立の事態を先取りし、スクープしたもので、新聞に書けなかったことをかえって残念に思っているからです。」

それに対し、外国出張延期とか、署名記事見合せとか、スジ違いも甚しい。いやがらせでしかないし、本当は承服しがたい。ただどあなたのお立場もあるでしょうから、最終的には要請に従います。それにしても、社が出張旅費を出すわけなし、招待してくれたオーストラリア政府に失礼ではないですか。こちらの注文どおり、鉱山や牧場、農園に泊りこんでの取材スケジュールを整えてくれたのに、渡航のその日になってキャンセルするなんて、外交儀礼にも反する。国外逃亡どころか、冷却期間をおくにも豪州出張は好都合でしょう。創価学会が告訴などしてくる

わけがないと確信しているけど、万が一、不測の事態が生じれば、一晩で帰ってこれます。

社が冷静さをとり戻し、予定どおり海外出張せよと命令してくるのを、明日の夜のフライト直前まで待っています。『60年安保回顧記事』は、局長であるあなたが書け、と命じられたから書いたまで。取扱いは一任します。それと、以後、私の原稿を社が使いたくないのであれば、出社する意味がないので、別命あるまで自宅待機しています。衆参ダブル選挙の勉強と分析でもしていきましょう。五階には、自宅謹慎していることにでも、しておいてください」

編集局長は、私の『ものわかりの良さ』に驚かれ、安心されたらしい。ウイスキーのお代わりを注文しながら、念を押された。

「キミはぼくから嚴重注意されたことにしておいてくれよ。そして、ほんのしばらくの間、自宅謹慎だ。60年安保原稿は必ず紙面化するからね」

一時間余にわたった話しあい、和気あいあい、といってよかった。編集局長は『上に強く、下には弱い』タイプで、私が『小学生的正義感に富んだ男』と評したほどの熱血漢であった。編集局長就任早々、社長といつケンカを始めるか、と社内で心配がたら噂されたこともあるほどだ。ゴルフに同行した出版局長から、『五階の状況』のある程度の説明は受けていた。五階からの圧力に対し、編集局長が精一杯、抵抗している、その編集局長を困らせるようなことはするなよ、といったかたちで忠告されたのだった。

私にしても、こたわるつもりはなかった。豪州出張も、60年安保原稿も、私の方から言い出したのではなく、社の命令によるもの。なにがなんでも、とつっぱるほどのことはない。すべてを編集局長にお任せした。

別れ際に編集局長は、ニヤッと笑いながら、私に尋ねた。「那須でのゴルフは、出版局長が一緒だったのだろう?」。ウソをつくわけにはいかないし、隠す必要もない。「ええ、一緒でした。でも、なんでご存知なのですか」「ゴルフで休む、との届けがあつて、時期が同じだから、一緒に行っているな、と思ったのさ。ところで、彼、なんかこの問題で言つてはいなかったかい?」「いや、別になにも言われませんでした」「おかしいなあ。なんでキミがこんなものを書いたのか、問い質しておくように、社長から命令されているはずだが……」。

中野好夫氏的那須の別荘での、社との激しいやりとり。出版局長と一緒にいるとは、内緒にしていたのだが、社の首脳部は、初めから承知のうえだったらしい。それにしても、出版局長がなにも私から事情聴取をしようとせず、すでに社長が問題にしていたと、親しい私になぜ、はっきり打ち明けてくれなかったかは、いま以て、ナゾである。

帰宅してから、評論家の臼井吉見氏にお詫びの電話を入れた。60年安保原稿のために、インタビューをお願いした人であり、九日夕刊に記事が掲載される旨、すでに伝えてあった。電話で、社内事情を説明し、紙面化が少し遅れますと申しあげた。臼井氏は親切にも「ムリをすることはない。原稿がボツになっても、私の方は一向にかまいません」と言ってくれた。

翌九日。私は愚かにも、オーストラリア出張に備え、旅行カバンに取材用具などを詰めこんで、社命を待っていた。「予定どおり出かけろ」との命令が出るかもしれない、といちるの望みを託していたのだ。しかし、昼すぎになって、同行予定のカメラマンから、特報部長がオーストラリア政府観光局の東京事務所に出かけ、招待旅行の中止を申し入れ、認められた、との連絡が入った。延期ではなく、中止だったのだ。私は自分の甘さを痛感させられた。カメラマンには「とば

「うちり被害をかけて申し訳ない」と謝った。その日、自宅に配達された夕刊には、私の書いた白井吉見インタビュー記事に代わって、翌十日組込み予定の60年安保関連原稿が、急遽、くりあげて、掲載されているのを読んだ。私が楽観していたほど事態はどうやら甘くなさそうだ。

私は自宅待機の時間を利用して、あらためて、『現代』七月号の「創価学会レポート」を読み直した。これまでは私の社外活動を黙認してきた社の首脳部が、今回だけ、にわかにクレームをつけてくる、それほどに、ジャーナリストとして、書くべからざるものを書いたのだろうか。冷静な目で、もう一度点検しておこうと思ったのだ。

ここに、その全文を再掲しておこう。のちに週刊誌等で、あるいは社の首脳部が私の退社後、社報等で、あたかも『池田大作氏の女のスクランダル』のみを書いたかの如く問題にされ、読者にも、そう印象づけられているようだが、一年半ほど経過したいま、冷静な目で読めば、実態が決してそういう性質、類いのものでないとは、一読して了解いただけると思う。